

日本アメリカ史学会 第12回（通算第40回）年次大会 プログラム

日時：2015年9月26日（土）、27日（日）

場所：北海道大学 人文・社会科学総合教育研究棟

〒060-0808 北海道札幌市北区北8条西5丁目

Tel: 011-716-2111（代表）

連絡先：村田勝幸（北海道大学） kmurata@let.hokudai.ac.jp

大会第1日 9月26日（土）

幹事会 12:00～13:00 (W203教室)

シンポジウムA (W203教室) 14:00～17:30

「戦時下アメリカのマイノリティーエスニシティ・人種・ジェンダーの視点から」

【趣旨】

アメリカ社会は、その誕生から現在に至るまで、戦争の影に覆われてきた。とりわけ20世紀の戦争のほぼすべてが、アメリカ国外で行われたにもかかわらず、大きな社会変動を引き起こしてきたといえる。社会変動をもたらした主要因の一つに、マイノリティにとっての「アメリカ市民の権利」という問題提起が存在した。本シンポジウムでは、20世紀、戦争の影に覆われたアメリカ合衆国においてエスニック・人種・ジェンダー・マイノリティの人々がどのように戦時動員され、軍事化されたのか、もしくは排除されたのか、また彼らが暮らしていたコミュニティがどのような影響を受けたのか、また彼らの移動によって受け入れることになった地域社会がどのような反応を示したのかを再検討したい。この場合、私たちが留意しなければならないのは、国家総動員体制のなかでマイノリティが一元的に同化され、「アメリカ人になる」という文脈ではなく、これらマイノリティの人々をめぐる国家的・社会的・文化的緊張関係であり、反動であり、妥協であり、新たな秩序の形成過程である。さらには、アメリカ合衆国におけるマイノリティの権利をめぐる運動の国際的な意義にも注目したい。

報告：

中野耕太郎（大阪大学）「第一次大戦と人種エスニック・マイノリティー総力戦と市民社会の再編」

高田馨里（大妻女子大学）「第二次世界大戦期、陸軍省の人種政策の転換と地域」

内田綾子（名古屋大学）「ベトナム戦争とアメリカ先住民—マイノリティ兵士と戦争の記憶」

コメント：和泉真澄（同志社大学）

中野聰（一橋大学）

司会：戸田山祐（東京大学）

総会 (W203教室) 17:35～18:20

懇親会 18:30～20:30 *北大の学生さんが誘導してくださいます

ホテル・ダイナスティ レストラン San Remo

札幌市北区北10条西3丁目7番地

TEL: 011-756-7733

URL: <http://www.hotel-dynasty.net/restaurant.html>

大会第2日 9月27日(日)

自由論題 9:20~12:05

- 9:20 開始・司会による報告者紹介等
9:30~10:05 第一報告
10:10~10:45 第二報告
10:50~11:25 第三報告
11:30~12:05 第四報告

*ただし、各報告を25分、質疑10分とする。

【セッション1】(文系5番教室) 司会: 小田悠生(中央大学)

- ① 鈴木俊弘(一橋大学・院)「更新される<他者>のイメージ—マースデン・ハートレの“Finnish Yankee Sauna”(1938)から、アメリカにおけるフィン系移民表象の変異を読む」
② 三浦順子(所属なし)「1943年テキサス・コケージアン人種平等決議からプラセロ・プログラム導入へ—移民管理と労働問題の交差に見る人種の再編とエスニック・ポリティクスの台頭」
③ 高橋和雅(専修大学・院)「マックスウェル・ストリートに生きた黒人たち—ニューベリー・アヴェニュー・センターの黎明期の活動を中心に」
④ 朱振興(同志社大学・院)「冷戦と黒人公民権運動の二重背景における中国系アメリカ人の歴史再考—中国系活動家の運動の視点から」

【セッション2】(文系1番教室) 司会: 中嶋啓雄(大阪大学)

- ① 壬生真紹(筑波大学・院)「ライシャワー駐日大使と慈覚大師円仁—学者時代の『入唐求法巡礼行記』研究による大使時代への影響についての一考察」
② 山本貴裕(広島経済大学)「ハワイ王国末期における福音派と異教との闘い—靈的・物質的進歩のために」
③ 橋本真吾(東京工業大学・院)「モリソン号派遣前後のアメリカ対東アジア政策の動向と変化」

【セッション3】(文系6番教室) 司会: 三須拓也(札幌大学)

- ① 村岡美奈(防衛大学校・講)「第一次世界大戦期からロシア内戦期のアメリカ・ユダヤ人による難民救済活動」
② 日野川静枝(元拓殖大学)「カリフォルニア大学の戦時動員体制づくりにおける研究契約の役割」
③ 志田淳二郎(中央大学・院)「『同盟管理』、『軍備管理』としてのアメリカのドイツ統一政策—ジョージ・H・W・ブッシュ政権期の『西西関係』再考」

シンポジウムB 13:00~16:00 (文系1番教室)

<開催地企画>「20世紀転換期の医のかたち—個人と公共の線引きをめぐって」

【趣旨】

健康を維持し病を治療するための公共の制度を構築・維持することは、近代国家の重要な役割である。現代ではその役割自体が問い直されることはなくなつて久しい。しかし20世紀への転換期には、健康や病という個人の領域に属する事柄について、どれを公共とみなすのか、ど

のように公共の制度を構築し運用するのか、科学的医学的発見が相次ぐ中で公的制度と社会的理解をどのように更新していくのか、などが激しく議論された。

日本におけるアメリカ合衆国史の中の医療史研究は、医療保険制度研究と優生学研究を除けば端緒についた段階である。しかしながらアメリカ社会史は、人種、ジェンダー、移民論など、身体をめぐるポリティクスの分析に大きな強みを持っている。そこで本シンポジウムでは、アメリカ史における身体をめぐる議論を医療史研究と接合し、アメリカに独特の問題——身体管理をめぐる権力関係や、科学コミュニケーション論との接合、民間主導・地域主導の医療・保健制度構築など——を浮かび上がらせる試みを試みる。いまわれわれが当然視する医の「かたち」がいかにして作り上げられてきたかを、アメリカの文脈において検討する。

報告： 小野直子（富山大学）「20世紀転換期の精神医療」

平体由美（札幌学院大学）「合衆国公衆衛生局とマラリア対策」

山岸敬和（南山大学）「19世紀末のアメリカ政治と病院制度」

コメント：千葉芳広（北海道医療大学）

市川智生（長崎大学）

司会：上野継義（京都産業大学）

シンポジウム C 13:00～16:00 (文系6番教室)

「都市の人種関係史」

【趣旨】

2014年のミズーリ州ファーガソンの事件に端を発する人種間関係の緊張は全米に衝撃を与えた。その後も各地で相次いだ警察官による無抵抗な市民に対する暴力を暴露した映像や2015年3月の司法省公民権局によるファーガソン警察についての調査報告書は、公民権法が成立してから半世紀が経過し、「黒人」大統領も誕生した21世紀のアメリカの都市において、暴力を正当化しうる人種主義が未だ現在進行形の問題であることを改めて突き付けたと言える。

そこで本シンポジウムでは、「都市の人種関係史」と題し、人種関係をめぐる現在進行形の情勢を念頭に置きながら、三人の報告者に各自の問題意識に沿った報告をして頂く。都市史や人種関係の研究者として、「現在」をどう捉えるか。現在の状況を念頭に置いたうえでどのような問題意識から「過去」と対話していくのか。今後の研究はどうあるべきなのか。三報告を事例に、今日のアメリカの都市と人種をめぐる現状を理解し、今後の歴史研究のあり方について考えるための視座を得る機会としたい。

報告：武井寛（岐阜聖徳学園大学）「都市空間をめぐる攻防—20世紀シカゴにおける公営住宅政策とアフリカ系アメリカ人の活動」

土屋和代（神奈川大学）「レルフ姉妹とマイケル・ブラウンのあいだ—ポスト公民権期アメリカの都市における身体と暴力」

大野あずさ（大阪経済大学）「都市アメリカ先住民と里子制度・養子縁組—インディアン児童福祉法(1978年)とその限界」

コメント：宮田伊知郎（埼玉大学）

司会：小阪裕城（一橋大学・院）